

<巻頭言>



今、何を考えるべきか

鈴木 藤一郎*

先日、世界水フォーラムが閉幕した。参加国は182の国・地域、参加者は実数で24,060人で当初の見込みを大幅に上回る盛り上がりようであった。今回の水フォーラムにおいても第二回の例にならない閣僚会議が開催された。イラク戦争の影響で、閣僚の参加者が大幅に減少することが心配されたが杞憂であった。会議の規模がこれまでのものをしのいだこともさることながら、「ヴァーチャルウォーターフォーラム」や「水の声」をはじめとした開かれた会議運営は、各国の参加者から称賛を浴びたという。

閣僚宣言には、「水資源管理と便益の共有」、「安全な飲料水と衛生」、「食料と農村開発のための水」、「水質汚濁防止と生態系の保全」及び「災害軽減と危機管理」という五つの課題とこれらに共通する「全般的政策」が列挙された。

閣僚宣言のサブタイトルに「琵琶湖・淀川流域からのメッセージ」が掲げられたのには、およそ水問題の解決には、流域的展開から地球規模の取り組みを含め、健全な水循環系の構築が必要だとの基本認識と、会場をひとつの都市に限定せず、京都を中心に滋賀から大阪に至る広がりを選んだことに対するこだわりなどが込められている。

この閣僚宣言の中には、ダムという単語は一度も用いられていない。誤解を恐れずにわかりやすく言えば、ダムをこれ以上造る必要がないと考える国とさらに造る必要があるとする国の意見を、ダムの効用を発揮する源に着目して「貯水池」という単語を用いることで折り合いがつけられた。ダムの効用を一切無視して全面否定するのではなく、その役割をきちんと認識した結果だと言えなくもない。

* 国土交通省河川局長

必要なダムを誤解に基づいて造らないのは間違いであるが、かといって無駄なダムは造ってはいけない。必要のないダムを造れば、その存在自体が間違いになる。また、たとえ造る必要があるダムであっても、その造り方を間違えるとその存在すら問われることになりかねない。

ダムが好きだとか嫌いというのは正しいとか間違いという問題ではない。さらに、どんなに資金がかかっても、ダム以外の方法で洪水処理を行ったり水資源開発を行うといっても、あるいは、安全度を下げてでもダムは造らないといっても、いずれもひとつの政策判断だから絶対に間違いとはいえない。費用対効果の検証も当然必要だ。もちろん実現可能で実効性のある代替案でなければ、話にならない。その上でその政策が受け入れられれば、後は、ダムを造っておけば防げた洪水が実際に起こって被害が起きたときの責任をどう考えるかである。

効果がほとんど期待できない代替案を、効果があるものと誤解してしまうと、これはほとんど悲劇的である。「コンクリートのダムの代わりに緑のダム」というようなことを、「ダムの治水利水機能を森林で代替」という意味で言うことがこれにあたる。「造る必要があるダムを誤解に基づいて造らない」ことになってしまう。

「ダムの造り方を間違える」というのはどんな場合だろう。勿体つけるようで恐縮だが、これは読者が一人ひとり考えてみてほしい。一つだけ言えることは、ダムの構想段階から供用にいたるすべての段階におけるありようが問われることになる。